『じゃんけん』

作者　淺羽　一

四人でじゃんけんをすると最低二人は同じものを出す。そして僕達は決まってその一組になった。そんな些細な出来事をあの頃の僕達はあたかも運命か奇蹟のように思っていた。遙佳（はるか）と親しくなるきっかけは大学の研究室で飼育していた実験用の動物の世話だった。

当時、地方の理系大学で特に動物実験をすることの多い研究室へ所属したばかりの三年生に、何よりもまず先に与えられた仕事がマウスやモルモットの世話だった。

毎日、朝と夕の二回、研究室へやって来て簡単なゲージの掃除と餌の準備をする。二人一組の当番制で、一日おきに週三日。だけどそれだと一日足りなくなってしまうから、一週間おきに週四日。そして僕達の研究室には新人として男女二人ずつ計四人がいたのだけれど、どういうわけか教授の指示で半ば強制的に当番の組は男女一人ずつのカップル形式になった。言うまでもないかも知れないが、学籍番号順と言うことで僕は遥佳とコンビを組んだ。

同じ学科に所属する同級生だったとしても、それまでろくに会話もしてこなかった相手と毎回毎回さして広くない密室で二人きり。もとより社交的な性格をしていたりすでに安定した恋愛関係を築いていたりする人間であったならばともかく、お世辞にも派手な生活とは言い難い日々を送っている理系オタクにとって、ましてやいかにも理系然としたイメージとはまるで異なる明るい容姿の女子が相手となれば、全く意識しないでいる方が難しく。勿論、いきなり片想いとか告白とか、そんな甘酸っぱい話に展開するなんてことも無かったものの、面倒なはずの下っ端仕事なのに少しも苦に感じていなかったのは確かだった。今にして考えれば、或いはそれこそが教授の狙いだったのかも知れない。だとすれば成功か失敗か極端に別れる策だろうけれど。

あの研究室の中で僕達は仲良くやれていた。それは遥佳との関係に限らず、四人ともがそうだった。と言うよりも、先輩や教授などから次々に与えられる指示や課題をこなす上で、どうしても仲間として結束せざるを得なかった。必ずしも教科書に太字で載っていない内容や実験のコツを手探りで見つけていく為には、恥ずかしながら一人一人の力だけでは足りなかった。だからこそ集まる機会も自然と多かった。

それをする理由はしょっちゅうとまで言わずともそれなりの頻度で転がっていた。例えば、実験に使った器具の量が多かった時に代表して洗浄や滅菌作業をする人間を決めようとか、ちょっと小腹が空いてきたものの研究室を無人にするのはまずいから代表して購買まで買い出しに行く人間を決めようとか、もっと言えば何かしらの失敗報告を教授や先輩にしに行く代表者を決めようとか。困った時のグー、チョキ、パー。じゃんけんは古来より便利な手段だった。だから問題は単に僕と遥佳の性格だった。

いつの頃からそんな風に決めていたのか覚えていないが、僕はいつも決まって最初にチョキを出した。グーは頑固っぽくて、パーは脳天気そうで、どちらも自然と出そうだけれど、チョキだけは意識しないと出せないし、形だって何となく洒落ているから。そんな子供じみた理由で、僕はいつも一番初めはチョキを出した。そしてまた、おかしな話で遥佳もまた自分の中でそんな決まり事を持っている人間だった。

あれ、とお互いにはっきりと意識したのは研究室への配属からおよそ四ヶ月くらいが経っていた初冬の頃だった。

それまではたまたま全員がチョキであいこだったり、三人がチョキを出して残りの一人がグーで勝ったりパーで負けたり、そうでなくともわざわざ記録を取ったりなんてしてい

なかったから、それほど変に思うことなんて無かった。発端はもう一人の男子が気の早いインフルエンザでしばらくの間を自宅で療養しなければならなくなったことだった。
そう言えば、何でか私たちってあいこになりやすいよね。言葉にしたのは遥佳だった。
あの時、僕と遥佳のコンビはともかく、残りの女子一人に彼の分まで世話をさせるのも気の毒で、とりあえず彼が戻ってくるまでの間は三人で分担してマウスなどの世話をしようという話になった。そこで僕達三人は改めて予定などを話し合い、なるべく平等になるように日数を調整することにしたのだが、その際に用いた恒例のじゃんけんでそれは発覚した。何せ、三人でのじゃんけんだ。しかもその内二人は決まって最初にチョキを出す。そうなると最早、二人でのじゃんけんと大差ない。四人ではまだ確率論に紛れていた不自然さが、度重なる「偶然」を経てようやく一気に表面化した。
彼女曰く、相手が何を出してくるか分からない、そんな中で悩むくらいなら迷わずピースマークでしょ。
何とまぁ単純な理由だと呆れた。実際、この子はアホの子だと思った。でも、お返しにこちらの理由を告げたら、遥佳はことさら呆れた様子で僕の方こそが単細胞だと言わんばかりの笑みを浮かべてきた。
失礼な態度だと、少しだけむっとした。だけどそれ以上に、どきっとした。その笑い方が、それまで見たことないくらいにあどけなくて、あたかも本当に気の置けない相手を前にしているみたいに感じられたから。その瞬間、僕は確かに恋に落ちた。
それ以降、僕達の間でじゃんけんの意味が変わった。当たり前だ。やる前から相手の出す手が分かっているじゃんけんなんて、勝負とは言えない。だけど、意味が変わったというのは、決して単なるつまらない出来レースに成り下がってしまったということじゃないし、また今度こそ正真正銘の真剣勝負になったということでもない。相変わらず僕は最初にチョキを出し続けて、遥佳もまた最初にチョキを出し続けた。そしてその度に、僕達は二人揃って勝って、或いは二人仲良く負けてしまった。
意地になっていたってわけじゃない。むしろ僕は楽しんでいた。だからそれまで以上に好んでチョキを出していた。後になって聞かされた話だが、遥佳もまた楽しんでくれていたらしかった。
そして僕達は以前にも増して二人一組になることが多くなり、いつしか自然とそれを当たり前に感じるようになっていた。透明な劇薬と蒸留水、それぞれどちらが満たされているのか分からないグラスの一方を手にとって頭から被るつもりで臨んだ告白に対して、返ってきた言葉は、って言うかもうちょっと早く言ってくれたらクリスマスとかお正月とかイベントがあったのに。全くもって女子は強いなと実感して、同時に内心で間近に迫ったバレンタインデーに期待した。その分、翌月のホワイトデーには難儀したけれど。
僕達はとても幸せな時間を過ごしていた。お節介な同期のわざとらしい気遣いのせいで気付けば研究室内で公認のカップルになってしまっていて、正直に言うと先輩や教授からの面白がるような視線は照れ臭かったけれど、それもまた心地良い刺激と言えばそうだった。
やがて学年が上がり、後輩が配属してきて、実験動物の世話係からも解放されて、だからって一緒の時間は減るどころかむしろ夜更かしや寝坊が出来る分だけ増えていて、とにかくあの頃の僕はもう色んな意味で一人暮らし万歳と思っていた。

僕はいつの頃からか、そんな毎日をさながら二人の新生活の予行演習みたいに考えていた。気の滅入るような就職活動も、エントリーシートの書き方や面接のアドバイスをし合ったり、単純に励まし合ったりしている内に幸いにして乗り切れて、このまま社会人になってもずっとこんな日々が続いていくものだと考えていた。喧嘩と呼べそうな喧嘩もなく、嫉妬や不信とはまるで無縁の、いつでも仲良く笑い合っていられる関係を、そのまま引き伸ばしたらまさしく僕達の将来へ繋がるのだろうと考えていた。卒業研究も一段落付いて卒業論文のめども立ち、二人の中を邪魔するものなんて何も無いはずだった。そして季節はまた冬を迎えようとしていた。

変化は、それを自覚するより先に僕達の生活へ入り込んでいた。

すでに言った通り、遥佳の外見は決して悪くなかった。可愛いとか綺麗とか美人の要素は色々とあるが、具体的な境界はと問われると実の所、曖昧だ。そこで僕は昔から自分なりの美人の定義で異性を見ることにしていた。つまり、仮に付き合ったとしてこいつなら多少の理不尽や我が儘も許せるな、そう思えたら美人ってことだと。いかにも童貞臭い発想だと呆れるが、長い間それを続けるに従い、ある意味でそれは真理だとも考えるようになっていた。そして遥佳は、とびきりとか絶世なんて枕詞は付かないとしても、僕にとっては確かに「美人」のままだった。だからこそ、自分自身が彼女のちょっとした我が儘や要求に可愛いと感じるよりも面倒だなと思ってしまう頻度が多くなっていると気付いた時は、愕然とした。

要するに、倦怠期だったのだろうと言えばそれまでだ。バタバタと忙しい時期が過ぎて、そのせいで逆に二人一緒の時間に対するありがたみが薄れてしまった。紛れもなく贅沢な悩みで、言い換えれば何処にでもありそうなのろけ話じみている。でも、当事者であるあの頃の僕達は、それを何よりも深刻な問題のごとく錯覚していた。

本当に、僕達は誰よりも気の合う二人のはずだった。だってじゃんけんをすればいつもあいこになるような二人だ。

だけど、二人きりでじゃんけんを繰り返せばいずれは必ず勝負が付く。だって、どれだけ気の合う二人でも、相手の心の全てを知ることなんて出来ないから。ましてや、僕達の場合はお互いに望んで初めてあいこになれる関係だ。だからどれだけ永遠に続けたくても、真剣になればなるほど終わりは必ず繰り返される。

当たり前なのだ。むしろそれこそが自然なのだ。それなのに僕は、酷く戸惑ってしまった。ほんの些細なすれ違いや口喧嘩にさえまるで裏切られたような気分になっていた。

別れを切り出したのは彼女だった。

私たちは一度お互いに距離を置いた方が良いのよと、ある日の晩に遥佳は僕を見ずに言った。決して嫌いになったとか他に好きな人が出来たとかそんな話はしなかった。だけどそうだからこそ余計にその意思は固そうだった。

僕は首を横に振った。言葉でも嫌だと告げた。でも、内心では受け入れていた。それどころか心の何処かでほっとしている自分もいた。それを表に出せなかっただけで。

遥佳はそんな僕を見て、あたかも一切を見透かしたように悲しそうに笑った。やっぱり美人だと思った。なのに今度は僕の方が目を逸らしていた。

僕は黙っていた。卑怯だと自覚しつつも、こちらからの言葉を待っている彼女を無視し続けた。沈黙のせいで部屋の空気は酷く重かったけれど、自分から言葉を紡ぐ辛さに比べ

れば遙かにましだった。
じゃあ、じゃんけんで決めようか。軽口を装った提案は、おそらく彼女なりの精一杯の頑張りだった。私が勝てば、別れる。あなたが勝てば、その時は…。そして彼女は続きを口にせず、そっと僕の視界に華奢な右手を差し出してきた。
僕はきっと怒っても良かった、そんなふざけた話は無いだろうと。実際、胸の中では馬鹿馬鹿しいと思っていた。なのに、気付けば僕は手を伸ばしていた。ゆっくりと顔を上げると、彼女は僕の手を見つめて今にも泣きそうな顔をしていた。それでも手を引っ込めようとはしなかった。僕もまた退かなかった。
かけ声は僕が出した。かすれたそれはやけに大きく聞こえた気がした。二人は自然と肘から先を振っていた。
結論はあっさりと出た。僕がグーで、彼女はパー。二人とも一言さえ発しなかった。僕は思わずぎゅっと拳を握りしめた。
お互いにチョキだけは出さないでいるだろうと、多分、彼女も分かっていた。でも、その一方で、もしもそれでもあいこになれたなら、或いはその時こそ本当にもう一度…。
せめてチョキを出していれば勝てていたなんて、そんなの今さら何の価値も無く。
僕は自身を硬くして、彼女は自らを大きく開いて。そんな皮肉めいた現実に何も言えない僕の前で、遥佳は静かに涙をこぼし、…初めて勝っちゃったと震える声でそう言って笑った。
僕は何かを言うべきだった。きっとせめてたった一言でも彼女の為に言うべきだった。だけどやっぱり僕は何も言えず。
まるで逃げ出すようにその手で思い切り床を殴っても、情けない痛みは全てを誤魔化すものとしてちっとも足りてくれなかった。

〈了〉